

深瀬のでくまわし

白山市立鶴来図書館 図書館講座

日時 平成二五年二月三日(白) 午後二時～

場所 白山市立鶴来総合文化会館クレイン

二階 第2・3研修室

第1部 深瀬のでくまわしの歴史と上演演目の解説

深瀬のでくまわし保存会長 北村良美氏

第2部 でくまわしの上演

演目 熊井太郎孝行之巻 初段



深瀬のでくまわし

熊井太郎孝行之巻 初段

1 あらすじ

ごう姫は千人切りの噂をきき、牛若と確信し、乳母（あさじ）とともに兜をつけ、男の姿に変装して五条大橋へやってきました。そこで千人切りを退治しに来た弁慶と出会います。

千人切りの牛若が、登場し、みつどもえの立ちまわりとなります。やがて、ごう姫は牛若への思いから、また弁慶も牛若に会うためにやってきたことがわかります。

弁慶は、牛若の家来となり、ごう姫も牛若と夫婦となって、4人そろって、若宮八幡宮へ参詣に向かいました。

2 登場人物



②弁 慶



①牛 若



④あさじ（乳母）

※前半は鎧兜姿



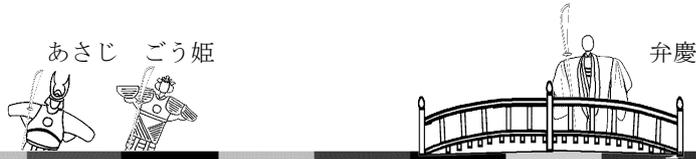
③ごう姫

※前半は鎧兜姿





弁慶



あさじ ごう姫

弁慶

※「弁慶」五条大橋、「ごう姫」、「あさじ」左より登場

川風もはや吹けすぐる橋の面、川岸高く夕波の、

川風が吹き通ぎ、橋から見える川面には夕波が立ちさわいでいます。

景色はそれが夜嵐の、夕べ程なき秋の風。

夜嵐が吹き、秋の風のなか、

光り輝く月の夜に、着たる鎧は、黒皮の、おどしにおどす大鎧、七つ道具の差物を、しどけなげに負いなして、

光り輝く月が出ている夜です。その橋の上を、午王姫は黒皮おどしの鎧に七つ道具を持ち、

長刀たずさえ出で給えば、乳母も続いて装束し、そぞろ浮き立つ我が心。

長刀をたずさえて、乳母といっしょにやってきました。恋しい人に会えるかと思うとなん

となく心も浮き立ちます。

露に玉ちる白波の立つより渡る橋板を、さも荒けなく踏みならせど、脅そう人もなかりけり。

心がはやるままに横板を荒々しく踏みならしてみますが、誰もあらわれません。

あさじ ごう姫



弁慶



あさじ ごう姫 弁慶



やありて彼処を見れば、案のごとく誰とも知れず、

しばらくして、向こうの方を見ますと、予想どおり、誰かはわかりませんが、

欄干に寄り添うて薄絹かざきおわします。

薄絹をかぶって欄干に寄りかかっている人がいます。

ひめぎみめのとめ 姫君乳母目と目を見合わせ、

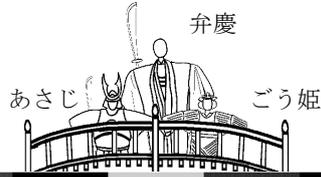
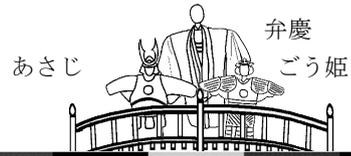
姫は乳母と目を見合わせ、

(ごう姫) 「すわや、これぞ」

「あれが、牛若君だ」

と走り寄り、弓手馬手よりとり付きて、

と走の寄って、両手にとりすがり、



(ごう姫) 「のう千人切り。御手にかからん志にてこれまで参り候なり。」

「千人切りをなさっているとか。その手にかかって死ぬ覚悟でここまでやってきました。」

うっとうしや。この絹を取らせ給え」

じゃまになりますから、この絹を取ってください」

と引きのくれば、

と言いつつ薄絹を引きのけますと、

おも
思いもよらぬ七尺ゆたかの大の法師。

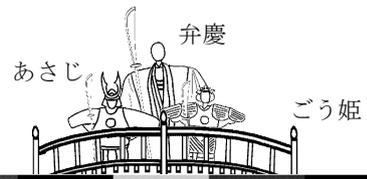
意外にも、七尺以上もある男の法師で、

りようがんになすま
両眼稲妻のごとくにて、二人の人々取って押さえ、

両眼は稲妻のように輝いていました。二人をすくにつかまえて

(弁慶) 「やあ、推参なる小冠者ばら。」

「やあ、無礼なやつらじや。」



この頃夜な夜な往来を妨ぐるは、おのれらにてありけるよな。

この頃、毎夜毎往来を妨げておるのは、おのれらじやな。

町人風情を悩ましたるとは抜群違うべし。

が、わしは、そういう町のものに迷惑をかけたりはせぬ。

我はここ比叡山西塔、北谷に隠れなき武蔵坊弁慶とう者なり。

わしは、あの比叡山の西塔、北谷に隠れもない武蔵坊弁慶というものじゃ。

掴み殺して捨てん」

おまえらのごときはすべにつかみ殺してやるわ」

と言え、ば、乳母、

といたしました。乳母は、

(あさじ)「のう人違いなり。聊爾はしなさるるな。

「いや、人違いでございます。早まってはなりません。



おんな
女にて候ぞ。必ず後悔し給うな

われらは女でございます。後悔なさいますぞ

と、二人一緒に言葉を揃えたまえば、弁慶つくづく見て、

と、二人一緒に言葉を揃えていますので、弁慶はつくづくとながめて、

(弁慶)「ふふ。声を聞けば女なり。姿を見れば夫なり。

「なるほど、声を聞けば女じゃのう。が、その姿は男ではないか。

これにはいかさま子細あるべし。様子を語れ」

「これはきこわけがあるのであろう。話して聞かせてくれ」

と引き起こせば、その時姫君ため息をほっとつき、

と引き起こしましたので、姫はほっとため息をつき、

「いかが言いてよからん」と、案じ患い給いしが、ちやくと思ひ出し、

むじ言えはいいかしはらく思案しておりましたが、すぐに思ひつらて、



(ごう姫) 「恥はずかしながら妾わらわはこの辺あたりの者ものなるが、
「私はこの辺あたりに住すむものでござります。」

この所ところの千人切せんになきりに父を討うたせ、あまり腹はらの立たつままに、
「この橋で父が千人切りのために討うたれました。あまりにも腹立はらしく思おもいまして、

女おんななるとも一太刀恨ひとたちうらみ、父の供養ちち きょうように奉ほうぜんため、
これまで参まいり候そうらえども、

父の供養のために、女なりとも、せめて一太刀、あびせようとここまでやってきたのです
が」

思おもいも寄よらぬ坊様ほんさまに押おさえられたよ、恥はずかしや」

思おもいがけずあなた様に取り押おさえられてしまいました。まことにお恥はずかしい次第です」

と、ふるいふるいうち笑わらい、顔かおうち赤あかめて申もつさるる。

と、ふるえながらもちよつと笑わらい、はずかしそうに顔を赤あかくして言いいました。



弁慶聞いて、

それを聞いて弁慶は、

(弁慶)「さてはさにてましますか。」

「そつういふことではありませんか。」

愚僧もその千人切りを従えんため、

愚僧も、その千人切りを成敗しようつと、

宵より待つこそ久しけれ。

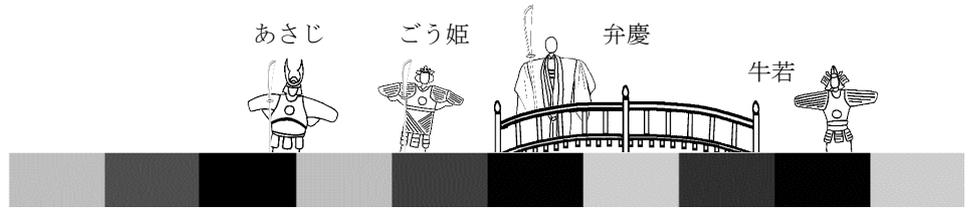
宵より待っておったのです。

心やすかれ、今にもこれへ来るべし。

が、ご安心なされよ。もうすべしに来るはずです。

討って本望遂げさせん」

私が討ち取ってそなたにも敵討の本望を遂げさせて進せましようつと



※「攻め」の節 軽快なリズムで戦いの場面を表す。

かたなよこ
刀汚しに三人までは切るべからず。
が、三人も切る必要はない。

なか
その中にも運のつきたる輩、一人出よ
うん
運のないやつ一人でよい、ここに出てくるがいい

べんけいき
とのたまえば、弁慶聞いて、
といいますので、弁慶は怒り、

すいさん
（弁慶）「ええ。推参なる小冠者や」
こかじゃ
「ええ。生意気なこわっぱめ」

と
と飛んでかかれば、ごう袂にすぎり、
たもと
と飛んで出ようと思いますが、牛王姫はそのたもとにすぎって、

（ごう姫）「のう、しばらく待たせ給え。して、あの者を何とかなされ候ぞ」
もの
な
「うや、ごう姫のお待たせはたわい。て、あの者を何とかなされ候ぞ」



弁慶聞いて、

「これを聞いた弁慶は、

(弁慶)「この長刀にてただ一打ちに」

「この長刀で一打ちに斬るつもりじゃ」

と申せば、ごう聞いて、

「言ひので、午王姫は

(ごう姫)「おおさま候わん。さりながら、

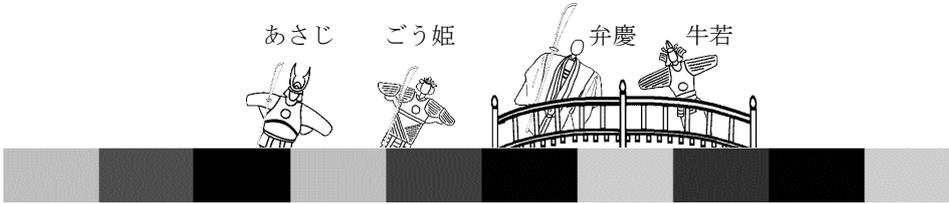
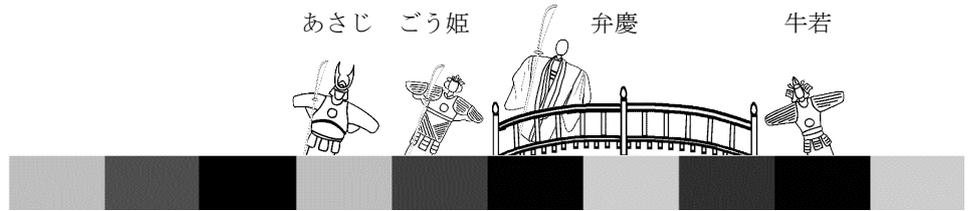
「なるほど、そうしたいところでしょうが、

同じくは生け捕りにして給わるまじきや」

「ごは、生け捕りにしていただけぬものでしょうか」

「おおやすき事。只今くくつて参らせん」

「おお、それはだめすいじつ。すへん、縛りあげておしり」



と、言いいもあえず、長なが刀なたを水みづ車ぐるまにくるりくるりくるりくるると、

と、言いつやいなや、長なが刀なたを水みづ車ぐるまのようようにくるくるくるくるくるくる振りまわしてかかかつつていいきました。

振ふつてかかればそむけて外はずし、拝おがみ打うちにささつくと打うてば、

が、牛うし若わかの方は、たたくみに外はずし、拝おがみ打うちにささくくと斬きりかかかつていくと、

右みぎの方かたに飛とびび違ちがう。

右みぎの方かたに入いれ違ちがいに飛とびんでいいきます。

おおつとり直なおして裾すそを払はえば、踊おどり上あがあつて足あしをもためず、

刀やいばを取り直なおして裾すそを払はえば、踊おどり上あがあつて足あしが見みえません。

中なかを払はえば頭こゝろを地ちにつつけ、跳とんはつ跳はねつ、抜ぬけまきつ紛まれつ、

胸むねをねねららうと、頭あたまを地ち面めんにつつけるほどにしてよよけ、跳とんだり跳はねたりして、

あさじ ごう姫 弁慶 牛若



あさじ ごう姫 弁慶 牛若



秘術ひじゆつをつ尽くしてしばしが程ほどこそ戦たたかいけれ。

秘術の限りを尽くして戦いました。

さすがに名なを得えし武蔵むさしなれども、蝶鳥翼ちようとりつばさのごとくなれば、

が、いくら豪腕で知られた武蔵坊とはいえ、蝶や鳥のように身軽に身をかわしていきますので、

しばしあぐんで見みえたりしが、

少々攻めあぐねているようすでした。それでも、

(弁慶) 「これ程ほどの小冠者こかじゃめを討うち漏もらしては口惜くちおしし。微塵みじんになさん」

「これほどの若者を討ち漏らしては無念。かならずつかまえてみせるぞ」

と長刀柄ながなたえなが長く、おっとりのべてかかりしを、牛若心うしわかごころに思おぼし召めせば、

と気を取り直し、長刀をしいいで、とびかかっていきます。牛若の方はこいつより、

あさじ ごう姫 弁慶 牛若



あさじ ごう姫 弁慶



※「ごう姫」と「あさじ」は「弁慶」に斬りかかる。

(弁慶)「きやつは不思議の痴れ者なり。」

「こいつは、なかなかの腕の坊主じゃ。」

いかにもして生け捕りにし、降参させ、下人にせばや」
なんとか生け捕りにして、降参させ、家来にしたいもの」

と、わさと受け太刀に見え給えば、

と思い、わざと攻めを受けるばかりで、かかっていったりはしません。

弁慶勝に乗って、たたみかけて討ってかかれば、

弁慶はそれに乗じて、たたみかけるように斬りかかっていきます。

ごうははっと思い、乳母もろとも弁慶に討ってかかる。

牛王姫は年若が不利と見て、乳母といっしょに弁慶に斬りかかりました。

あさじ ごう姫 弁慶

牛若



あさじ ごう姫 弁慶 牛若



弁慶は振り返って、

弁慶は振り返って、

(弁慶)「やれ、粗相者。愚僧なるわ」

「やい、この粗忽者。わしじゃ。愚僧じゃ」

と言うひまに、牛若 礎を踏み落とし、

と言っている間に、牛若が飛びかかり、

両足取って引き倒し、馬乗りになどと乗り、

両足を取って引き倒し、馬乗りになどと乗って、

(牛若)「さあ今が最期ぞ。念仏申せ」

「さあもう最期だ。観念せいよ」

とありければ、弁慶下より、

と言いますと、弁慶は下から、



(弁慶) 「愚僧をかく手ごめにするもの、人間にてはよもあらじ。

「わしをこのように手ごめにするとは、こいつは人間ではないな。」

やれ女房ども、折り合え」

やい、女どもよ、出てこい」

と呼ばわれれば、姫も乳母も弓手馬手より走りつけ、

と叫びました。姫も乳母も両側から駆け寄り、

(ごう姫・あさじ)

「のう牛若様、許させ給え」

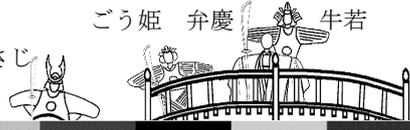
「牛若様、許してください」

と取りつけば、牛若身給い、

と取りつきました。牛若は二人の出で立ちをこらんになり、

ごう姫 弁慶 牛若

あさじ



ごう姫 弁慶 牛若

あさじ



(牛 若) 「見れば女性の身として、我が名を呼ぶは心得ず。誰人なるぞ」

「見れば、女の身。なのに、私の名を呼ぶとは不審。そなたは誰じゃ」

とありければ、

と聞きました。姫は、

(ごう姫) 「うたてやな。見忘れさせ給うかや。」

「ああ、なげかわしい。お見忘れでございましょうか。」

鎌田が妹のこうにて候が、

鎌田正清の妹の午王でございます。

いつぞやの雨やどりに託言ばかり仰せられしを、

いっそやの雨やどりに、ほんのしばらくお話しをしたではございせんか。

誠と思ひ明け暮れと、恋い焦がるる悲しさに、

以来、その言葉を頼りに、明け暮れ恋い焦がれておりましたが



とても叶わぬ恋ならば、御手にかかり死なんがため、
どうせ叶わぬ恋ならば、あなたさまの手にかかって死のうと、

これまで参り候に、まず自らを害して給わり候え」

「こうしてやって参ったのです。弁慶様を討つ前に、まず私を討ってください」

と、抱きつきてぞ口説きける。

と、抱きついて訴えました。

その時弁慶、

その時、弁慶が、

(弁慶)「さては御身は牛若子にてましますか。」

「では、あなた様は、牛若様でしたか。」

「ここをゆるめて給われ。申したき事の候」

「ほら、手をゆるめてください。お話しくださいが、お話を」



※「ごう姫」「あさじ」が「おんなでく」にかわる。

(牛若)「心得たり」
こころえ

「わかった」

と牛若、引き起こして問い給えば、
うしわか ひ お と たま

と牛若が弁慶を引き起こしてわけを開きました。

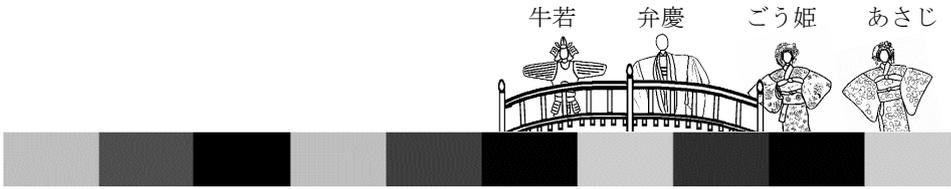
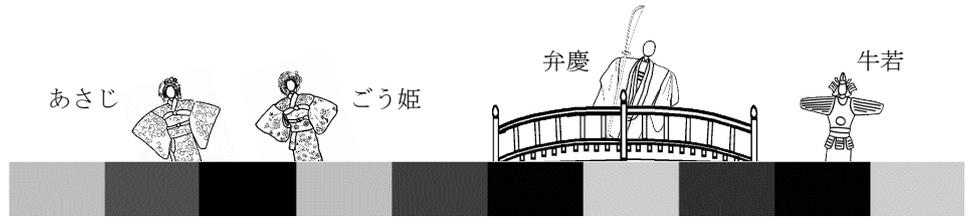
弁慶涙をはらはらと流し、
べんけいなみだ なが

弁慶は涙をはらはらと流しながら、

(弁慶)「あっぱれ牛若君にてあらずんば、それがしをかく組み敷くべき者覚えず。
うしわかぎみ ものおぼ
「なるほど、牛若君であれば、わたくしを組み敷くのも当然でございます。」

愚僧は西塔の武蔵坊弁慶と申す者にて候。
ぐそう さいとう むさしぼうべんけい もう もの そうろう

私めは、比叡山西塔に住む武蔵坊弁慶と申す僧でございます。



御身様にめぐり合はんそのために、この年頃 心を尽くし候なり。

あなた様にめぐり合ったために、長年、苦勞をしてきました。

家来になされ下されなば、かたじけなく存ずべし

ぜひ、家来にしてくださいませ。お願いでございます。

と謹んで申しければ、

と丁寧にお願ひしました。

(牛若)「さては武蔵か、嬉しやな。

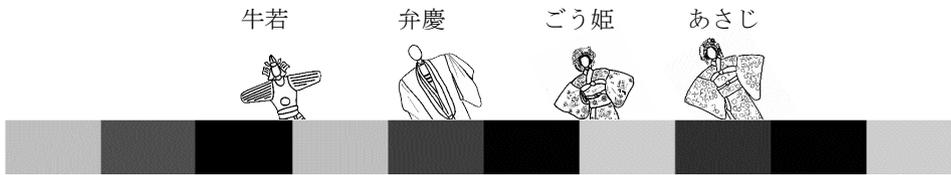
「おお、そなたが武蔵坊か。なんと嬉しいこと。

我もおことを聞き及び、めぐり合わんと尋ねしに、

わしも、そなたのことを聞いて、はやく会いたいとさがしておった。

これまたどうじゃ。若宮八幡のお引き合わせなり。

これは、どうやら、若宮八幡の神のお引き合わせである。



「家来となりて共々に、おごる平家を亡ぼすべき思案を頼む」
せひ家来になつてくれ。して、いっしょに、おごる平家を亡ぼすべき手はずを
考えることによつてはどうか」

とありければ、弁慶承り、

「この牛若の返事を聞いて、弁慶は、

（弁慶）「御心安く思し召せ。我が君とそれがし、心を合はす程ならば、
」御安心ください。我が君とそれがしが心を合はせれば、

日本秋津島がその内に、手に立つ者のあるべきか。

「この日本にかなうものがあるとは思えませぬ。」

喜び給え、ごうの姫。
お喜びください、牛王姫。



志こころざしの殊勝しゆしょうなれば、愚僧ぐそうが即ち仲人すなわ なこうどなり。

そなたもまことに立派な心がけでいらっしやる。愚僧が仲人になりましょう。

さあ、ここで、夫婦の契りをかわすがよい。

主従しゆじゆう夫婦ふうふうの結びむすびの神かみ、まずまず当社とうしやへ参詣さんけいせん。

主従夫婦の結びの神に祈るため、まずは八幡宮に参詣することにいたしましょう。

いざこなたへ、こなたへ」

さあ、こちうへ」

と、四人よにんうち連れつそれよりも、八幡宮はちまんぐうへと参らまいる。

と、四人うち連れて、八幡宮へ向かったのです。

まことに源氏げんじの末繁盛すえはんじょう。

まことにこれで源氏の将来の繁盛は約束されたようなもの、

めでたかりとも、なかなか申もうすばかりはなかりけり。

なんともめでたかりことでありました。

